126　フランス革命（4）

№124**からつづく**　第一帝政が終わったところから

1814年4月　6日　**ルイ18世**即位（位1814.4.6～1815.3.20、1815.7.8～1824.9.16）　ブルボン王朝に戻る。（**復古王政**）
過激王党派はアンシャンレジームの復活を望んだが、ルイ18世は「憲章」を発布、所有権の不可侵、法の下の平等を認め革命の成果を保証した。ルイ16世の時代に追放されたエミグレ（亡命貴族）の復帰を助ける一方で、労働者や農民などの下層階級に対しても穏和な政策を取った。晩年に、甥の暗殺を機に穏健政策を廃して絶対王政を復活させ、愛人やアルトワ伯の政治干渉を招き、『赤と黒』の時代を生んだ。
1814.9.1　ウィーン会議始まる　正統主義を原則
「会議は踊る、されど進まず」
1815年2月　26日　ナポレオン、【1:　　】脱出

3月　1日　ナポレオン一時復位（「百日天下」）
20日　ルイ18世一時退位（1815.7.8復位）
1815.6.9　ウィーン議定書調印
1815年6月　18日　英普連合軍に「【2:　　】」で敗北、退位。

7月　8日　ルイ18世復位
ナポレオンは、今度は囚人として南大西洋の絶海の孤島【3:　　】に流され、同島で1821年没した。
セントヘレナ島の総督ハドソン=ロウは誇り高いナポレオンを「ボナパルト将軍」と呼び、腐ったブドウ酒を振舞うなどの無礼な振る舞いで徹底して愚弄した。また、体調が悪化していたにもかかわらず主治医を本国に帰国させた。死因は公式には胃癌。

復古王政

帝政

王政

1824年　ルイ18世死去により、王弟アルトワ伯（ルイ16､18世の弟）が、【4:　　】として即位。
議会の解散や絶対王政復活を目指すなど兄以上の反動的な専制政治を行なった。№128で詳述する。
【4】は1830年、**七月革命**で倒されイギリスに亡命。彼はブルボン家としては最後の国王となった。ルイ=フィリップが国王に擁立され**七月王政**に移行したが（実質的にはブルジョワ支配体制）、ルイ=フィリップはオルレアン家である。彼も1848年の**二月革命**で打倒されフランスにおける王政は終焉を迎えた。

フランス革命は、<u>普遍的な理念</u>にもとづき、フランス社会を根底から変革した。
下記1)2)　**その影響は全ヨーロッパに及んだ。**

1）**自由平等の理念**‥‥人権宣言(1789年)に表現されている。
2）**国民国家の理念**‥‥革命政府は、法的に平等な市民であることが確認された個々人を、【5:　　】として直接、国家が掌握することを追求した。
絶対王政は必ずしも「絶対」ではなかった。絶対王政は人々を職能・地域・身分などの集団を通じて把握したのみだった。それも当時としては画期的だったが、個々の人間を「国民」として掌握していたのではなかった！絶対王政の下では国民意識などありようがない。なぜなら、主権は国王にあり、国民は国家のことを「わがこと」として意識する必要もなければ義務もなかった。それを変えたのはフランス革命である。

革命政府は国民意識の形成に努めた

1）本書№124のＢ面「ジャコバン派の独裁」③④⑤⑥を参照せよ。
2）その極みは、【6:　　】**教育**である。**地域的な言語を否定してフランス語を強要**した。
≪参考≫　1985年以降、わが国の教科書から消えた作品＝『最後の授業』(La Dernière Classe)
作者：アルフォンス・ドーデ（Alphonse Daudet）の短編小説　1873年（第三共和政時代）に出版。
≪あらすじ≫普仏戦争に敗れたフランスはアルザス・ロレーヌをプロイセンに奪われた。（ドイツ語では「エルザス・ロートリンゲン」)。アルザス地方のある初等学校。今日は教室の後方には元村長をはじめ多くの村人たちが古い教科書を手に集まっている。アメル先生は生徒と大人たちに、「皆さん、私が授業をするのはこれが最後です。アルザスとロレーヌの学校では、ドイツ語しか教えてはいけないという命令が、ベルリンから来ました。‥（略）‥新しい先生が明日見えます。今日はフランス語の最後の授業です。」アメル先生が「これほど辛抱強く説明し」てくれた事は無かったし、生徒も「これほどよく聞いた事は一度だって無かった」。先生は熱弁をふるい、「世界中で一番美しい、一番はっきりとした、一番力強い言葉」であるフランス語を決して忘れてはいけない、何故なら「ある民族が奴隷となっても、その国語を保っている限りはその牢獄の鍵を握っているようなものだから」とフランス語の優秀さを生徒に語り、黒板に「Vive La France!」（フランス万歳!）と書いて最後の授業を終える。
本書著者も高校生時代に教科書で読んだ。この作品を読んで大学の「第二外国語」をフランス語にした人も多かった。1985年以降、わが国の教科書から消されたのは、「国語」イデオロギーによって言語的多様性を否定する側面を持つ政治的作品であるとの批判があったからである。歴史的にアルザス地方の言葉はドイツ語（の一方言）であつて、フランス語では決してなかった。この作品は、あたかもフランス語がアルザスの人々の母語であるかのように、事実とはまったく逆に描いている。フランス革命政府はドイツ語圏のアルザス・ロレーヌの人々にフランス語を強要していた。わが国がかつてアジア諸国で行った言語政策についても、併せて学んでおこう。

ナポレオンはヨーロッパ各地にナショナリズムの種を蒔いた

1）ナポレオンは、征服した地域に前掲のような考え方を広めた。それは、封建制の重圧に苦しむ諸国民の意識を目覚めさせると同時に、侵略者フランスに対するナショナリズムを各地に芽生えさせた。

2）フランス革命の影響が自国に広まるのを恐れた支配者が自ら改革を起こした例もある。
例えば、1807年からフランス軍が駐留し、国家滅亡の危機にさらされた【7:　　】では、シュタイン 1757-1831、ハルデンベルク 1750-1822 らが軍制や教育の改革、農奴解放などの一連の改革を実施した。これを【8:　　】という。　№135へ続く。

シュタイン　ティルジット条約後の首相 任1807-08
農奴制の廃止、行政機構の改革など「上からの近代化」を推進。ナポレオンの圧力で罷免された。

ハルデンベルク　シュタインの継承者。首相 任1810-22。行政機構の改革、農業改革、営業の自由化などプロイセンの近代化を推進。後のウィーン会議全権。

また、哲学者の【9:　　】1762-1814は、1807年、フランス軍占領下のベルリンで「ドイツ国民に告ぐ」と題した14回にわたる連続講演を行い、ドイツの民族的独立と文化の再建を説き、国民意識の覚醒を訴えた。

「ドイツ国民に告ぐ」（1807年）：‥もし余が、ここに余の目前に於いて鼓動しつつある何人かの胸中に火花を投げ、それがそこに光り続けて生命を得るようになし得たとするならば、‥祖国の全体に、偏陬（へんすう）の地に至るまで、祖国的思念の唯一の流動する団結の焔（ほのお）が広がって、他に点火せんことを祈るのである。‥（略）‥今もなお自己を国民の一員と信じ、この国民を大なる高尚なるものと考え、この国民に望みを嘱（たく）し、この国民のためにおのれを賭し、忍び且つ堪ふるドイツは、いづれも皆この度こそは信念の動揺から拉（ひし）ぎ出さねばならぬ。（フィイテ『ドイツ国民に告ぐ』、大津康訳、岩波文庫）

政治的な文書と思われがちだが、ほとんどが教育に関する内容で、国民の独立のためには国民全体の道徳的革新が不可欠と考え、その手段を青少年の教育に求めて公教育の徹底を主張し、敗戦に打ちのめされたドイツ人を奮い立たせた。

3）スペインでは、1808年、ナポレオン支配に対し、**スペイン反乱**（＝イベリア半島戦争　1808～1814年）が起きた。ナポレオンは、兄**ジョセフ**をスペイン国王にした。これに抗議して農民を主とする民族主義的抵抗が起こり、反乱に発展した。イギリスも反乱軍を支援。軍事力で劣勢の反乱軍は粘り強いゲリラ戦術で戦い、ナポレオンは最後までこれを鎮圧できなかった。有名な絵画**「1808年５月３日の処刑」**（ゴヤ、制作は1814年）は受験的にも重要。

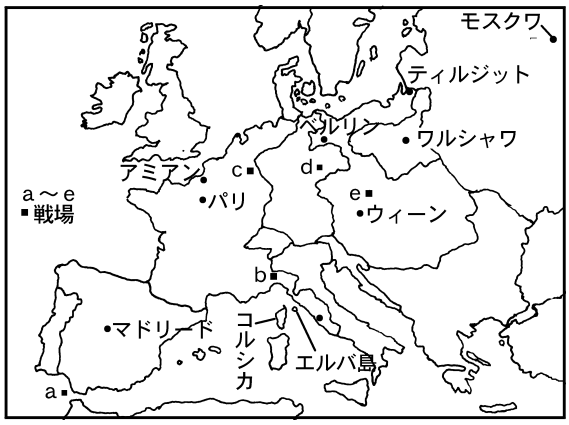
4）エジプトではムハンマド=アリーがナポレオンの侵略軍と戦い、総督となって（1805）事実上の独立を獲得した。ギリシアではオスマン帝国に対して独立戦争(1821-29)が起き、独立を達成した。別項で詳述する。

ナショナリズムとは何か、明確にまとめておこう。

ナショナリズムとは、自らの民族的な価値（国民意識ないしは民族意識）を強く意識し、自国ないしは自民族の立場の強化に努めようとする考え。フランス革命から始まり、19世紀後半以降、更に拡大した。20世紀以降、日本語で書かれた文献では、次のように使い分けている例が多い。

訳語	（１）**民族主義**　と言い換え可能	（２）**国民主義**　と言い換え可能	（３）**国家主義**　と言い換え可能
意味	他国・他民族の支配下に置かれている民族が**自立・独立**をめざす考え。	分裂状態にあった民族が**統一国家の形成**をめざす考え。	他国を侵略し、他民族を抑圧してまでも、**国家の拡大**を実現しようとする考え。
用例	「19世紀、ナショナリズムに目覚めたマジャール人、イタリア人、ポーランド人などは、オーストリア帝国の支配下から自立をめざした。」	「19世紀、ナショナリズムが高揚したイタリアは1861年、ドイツは1871年に国家の統一を達成した。」	「20世紀、凶暴なナショナリズムが２回もの世界大戦を惹起した。」

「ナポレオンはヨーロッパ各地にナショナリズムの種を蒔いた」という時の「ナショナリズム」は（１）である。出題文に「ナショナリズム」とあったら、この３つのどれに当たるか明確に判別しよう。



復習　a～eを年代順に並び替え、年代・位置・要点を記せ。

1）1800　　b　オーストリアとの戦いに勝敗はつかなかったが、1802年にアミアンの和約を引き出し、第２回対仏大同盟を崩壊させた。

2）

3）

4）

5）

a トラファルガー、b マレンゴ、c ワーテルロー、d ライプツィヒ、e アウステルリッツ